

A 大学基礎看護学実習 I の実習過程評価

Evaluation and Problem for Fundamental Nursing
Practice I of the University A

松永早苗 今井 恵 千田美紀子
Sanae Matsunaga Megumi Imai Mikiko Senda

井上美代江 辻 俊子 井下照代
Miyoe Inoue Toshiko Tuji Teruyo Inoshita

上野 範子 森下 妙子
Noriko Ueno Taeko Morishita

聖泉看護学研究 第3巻 別刷

(2014年3月27日発行)

A大学基礎看護学実習 I の実習過程評価

Evaluation and Problem for Fundamental Nursing Practice I of the University A

松永 早苗¹⁾*, 今井 恵¹⁾, 千田 美紀子¹⁾, 井上 美代江¹⁾,
 Sanae Matsunaga, Megumi Imai, Mikiko Senda, Miyoe Inoue,
 辻 俊子¹⁾, 井下 照代¹⁾, 上野 範子¹⁾, 森下 妙子¹⁾
 Toshiko Tuji, Teruyo Inoshita, Noriko Ueno, Taeko Morishita

キーワード 基礎看護学実習 I, 学生視点の評価, 授業過程評価

Key words fundamental nursing practice I, evaluation of the student viewpoint, clinical practice evaluation

抄録

背景 基礎看護学実習 I での学生の実習に対する充実感は、以後の学生生活や看護への思いに大きな影響を与える。また、学生が、教員や実習指導者との相互関係の中で、既習した知識や技術を主体的に実習へ活かすことは、実習目的を達成するために必要不可欠となる。

目的 学生が、基礎看護学実習 I を効果的に実施するため、学生の視点で実習過程を評価した結果から今後の課題を抽出する。

方法 研究の趣旨に賛同した看護大学 1 年の学生を対象に、授業過程評価スケール（看護学実習用）を用いて調査した。

結果・考察 実習過程は、総合的には高い評価といえた。各下位尺度の平均値で最も低かったのは、【学生-患者関係】であり、受持ち患者を持たない実習過程のため、患者との関係からの学びに満足できなかったと考える。次に、【オリエンテーション】【学習内容・方法】が低かった。これは、学生が、オリエンテーションや既習の学習を実習過程へ具体的に活かす方法を理解できていないと考える。

結論：一人の患者を通して実習過程を学べる配慮を行う。実習を連想させる講義やオリエンテーションを行う。また、継続した教員と指導者の実習調整が必要である。

Abstract

Background A sense of fulfillments of the student of Fundamental Nursing Practice I has a major influence on student's future.

Objective The goal is to improve Fundamental Nursing Practice I from the student's evaluation.

Methods A evaluation surveys with clinical practice evaluation.

Results/Discussion The mean of [orientation], [learning contents, method] and [student - patient relations] were low. Students are not able to understand how to make use of specifically to the training process, learned and orientation.

Conclusions Perform a lecture and orientation to suggest practice and continue adjusting among teacher and nurse.

I. 緒言

A大学の基礎看護学実習 I は、人々の生活や健康上のニーズを知り、看護の対象である人間を理解する目的で、患者の生活環境や療養生活を看護師の指導のもとに見学実習する。看護大学 1 年次の 9 月に基礎看護学実習を行い、学生は初めて患者と接し、主として看護師やその他の医療職から

指導を受ける。

基礎看護学実習 I での学生の実習に対する充実感は、今後の学生生活や看護への思いに大きな影響を与えると予測される。また、学生が、教員や実習指導者との相互関係の中で、既習した知識や技術を主体的に実習へ活かすことは、実習目的を達成するために必要不可欠となる。そこで、今後の基礎看護学実習 I を学生が主体的に取り組み、

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 看護学科 School of Nursing, Seisen University

* E-mail matsun-s@seisen.ac.jp

より効果的に実施するために、学生の視点で基礎看護学実習Ⅰの実習過程を評価し、今後の課題を抽出した。

先行文献において、基礎看護学実習Ⅰを評価し、実習過程を改善している研究は少なかった。本研究から得られた基礎看護学実習Ⅰの課題は、看護学生となり初めての臨地実習の過程を改善する基礎資料となると考える。

Ⅱ. 研究目的

A大学の基礎看護学実習Ⅰの実習過程を、学生の視点で評価し、今後の課題を抽出する。

Ⅲ. A大学基礎看護学実習の概要

2012年度の基礎看護学実習Ⅰは、8月の定期試験終了後の半日、9月の臨地の実習前半日の実習オリエンテーションと臨地実習3日間、そして臨地実習での学びをまとめて発表する1日の合計1週間行った。8月の実習オリエンテーションで、実習の目的と目標を説明し、臨地実習までの期間に実習目的と目標を達成するために既習の学習内容の見直しや、自己学習の課題を提示した(表1)。臨地実習は、主として看護師に同行し、看護実践や他の医療職との連携を見学した。また、看護師

の指導のもと、患者と療養生活についてコミュニケーションを図った。1日の実習終了時には、実習メンバー、臨地実習指導者、教員の構成で、実習の学びや課題についてカンファレンスを行い、意見をまとめた。

実習のまとめでは、各実習先で学んだ実習目的・目標に沿った内容を、実習グループで発表し、学びを共有した。

1. 基礎看護学実習Ⅰ実習目的

地域で生活し病院に通院、あるいは入院しながら治療を受けている人々に出会い、コミュニケーションを図り、人々の生活や健康上のニーズを知り看護の対象である人間を理解する。さらに看護の機能と役割について学ぶ。

2. 基礎看護学実習Ⅰの実習施設の概要

実習は、地域医療に貢献している総合病院で実施した。3施設とも、A大学の看護学生が、地域に根差し活躍することを期待して実習を受け入れている。また、3施設とも、学生の支援制度を設け、A大学学生の学習を積極的に支援している。さらに、A大学の教員は、地域の医療機関の出身者も多く、実習施設と良好な協力関係を築いている。

表1 基礎看護学実習Ⅰの内容

実習場所	実習内容
学内オリエンテーション①	<ul style="list-style-type: none"> 基礎看護学実習Ⅰの要項説明(行動計画, 記録の説明も含む) 実習態度の具体的な説明 実習事前課題の提示 「看護覚え書」ナイチンゲール 「看護の基本となるもの」ヘンダーソン 事前に読み、実習の目的にそってまとめる
学内オリエンテーション②	<ul style="list-style-type: none"> 実習前の身だしなみ確認(白衣着用) 実習記録の説明 実習のまとめに向けた準備 グループで実習のまとめで発表する内容を検討 カンファレンスの練習を実施
臨地実習3日間	<ul style="list-style-type: none"> 病院概要のオリエンテーションと見学 病棟概要のオリエンテーションと見学 看護実践の見学, 参加 カンファレンス
学内 実習まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 各実習施設, 病棟ごとに実習目的・目標に沿った内容で学びをまとめ発表

IV. 方 法

1. 研究対象者

2012年度に基礎看護学実習Ⅰを履修したA大学1年生（男子25名，女子64名）86名のうち，研究の目的・方法・倫理的配慮について説明を受け，研究の趣旨に賛同した学生を対象とした。なお，研究対象者にとって，A大学入学後の初めての病院実習であった。

2. 研究期間と時期

1) 研究期間：A大学の2012年9月18日～9月24日の基礎看護学実習Ⅰを研究期間とした。

2) 研究時期：研究期間の基礎看護学実習Ⅰ終了後に調査用紙を用いた研究を実施した。基礎看護学実習Ⅰのまとめ終了後の教室内で調査した。

3. 研究方法と研究内容

研究には，舟島らが開発した授業過程評価スケ-

ール（看護学実習用）を舟島の承諾を得て用いた（尺度使用の承諾日：2012年5月25日）。同スケールは，信頼性・妥当性が検証されている。なお，A大学の实習内容に合わせてあてはまらない下位尺度の一部を，評価から除外した。

授業過程評価スケール（舟島ら，2009）は，学生が評価者となって実習の授業過程を評価し，結果を教員が解釈し，次の実習過程の改善につなげるのを目的としている。学生の視点を反映させた評価から，実習目標を達成でき，学生自身が質の高い実習過程であったと評価するのに適している。スケールは，本研究の研究目的と合致しており，結果から改善すべき実習過程を考察し，次の実習に活かす。

授業評価スケールは，学生の視点を反映させた評価基準を因子分析した10下位尺度42質問項目から構成されている（表2）。10下位尺度の項目は，Ⅰ【オリエンテーション】，Ⅱ【学習内容・方法】，Ⅲ【学生—患者関係】，Ⅳ【教員・看護師—

表2 授業過程評価スケール看護学実習用の10下位尺度項目の概要

下位尺度項目	質問項目の概要
Ⅰ. オリエンテーション	オリエンテーションの必要性に対する学生の期待と実際の実践状況との一致，その適切性
Ⅱ. 学習内容・方法	学生が学習目標とする援助を受持ち患者に実施できたか，また既習内容を活用しながら実習を展開できたかといった実習における学生の実習内容・方法の適切性
Ⅲ. 学生—患者関係	実習における教員，看護師の学生と患者のコミュニケーションおよび関係性
Ⅳ. 教員，看護師—学生相互行為	実習における教員，看護師の学生に対する対応の適切性，看護師の患者に対する態度から学ぶ機会の量，教員や看護師へのカンファレンスへの参加度を測定する
Ⅴ. 学生への期待・要求	教員や看護師が学生に期待する行動の難易度と学生の期待度レベルの一致および質問量の適切性
Ⅵ. 教員・看護師間の指導調整	教員と看護師間の指導の一貫性と連携の適切性
Ⅶ. 目標・課題の設定	実習展開過程における目的・目標の明確さ，学習課題とその必要性の理解のしやすさ，記録物・提出物の量の適切性
Ⅷ. 実習記録の活用	実習指導における記録物の活用度
Ⅸ. カンファレンスと時間調整	実習の開始・終了や休憩時間に対する調整の適切性，カンファレンスの時間と内容の適切性
Ⅹ. 学生—人的環境関係	学生同士，および学生と教員，看護師，患者，他の医療従事者などとの相互行為の円滑さ，それら相互行為の円滑化に向けた教員の配慮の適切性

学生相互行為】， V【学生への期待・要求】， VI【教員・看護師間の指導調整】， VII【目標・課題の設定】， VIII【実習記録の活用】， IX【カンファレンスと時間調整】， X【学生—人的環境関係】である。

本研究では，受持ち患者を持たず，主として看護師に同行して見学実習を行う本学の基礎看護学実習 I の内容に合わせて下位尺度【学習内容・方法】の 6 項目から受持ち患者に関する 3 項目を除外した 39 の質問項目で調査した。選択肢は，「非常にあてはまる：5 点」「かなりあてはまる：4 点」「大体あてはまる：3 点」「あまりあてはまらない：2 点」「全くあてはまらない：1 点」の 5 段階リッカート型尺度である。総得点が高いほど，学生が実習過程の質が高いと評価している。

4. 分析方法

データの分析は，統計ソフト SPSS Statistics 20 を使用し，以下の分析を行った。

- 1) 調査用紙の各下位尺度の合計点から平均値を算出し，記述統計を行い分析した。
- 2) 下位尺度全体の総得点から高得点領域 (+1 標準偏差以上)，中得点領域 (高得点領域と低得点領域に含まれない領域)，低得点領域 (-1 標準偏差以下) の 3 領域にわけ，各領域における下位尺度の記述統計を分析した。今後の基礎看護学実習 I の実習過程をより効果的に改善するために，低得点領域の学生評価を主に考察し，

課題を抽出した。課題を改善することで，低得点領域の学生が，高得点・中得点領域に属する変化をもたらすと考えた。

5. 倫理的配慮

研究対象者には，研究の目的や参加の自由，不参加の場合も不利益を生じないこと，匿名性の保障，実習の評価に影響しないことを口頭と文書で説明した。研究は，当該科目の評価終了後に実施した。また調査用紙の回収は，教室の後部に回収ボックスを終日設置し，自由投函できるように配慮した。なお，本研究は，A 大学倫理委員会の承認を得て実施した (承認番号：8)。

V. 結果

調査用紙の回収率は 96% (83 名)，有効回答率は 95% (79 名) であった。

10 下位尺度の総得点は，154.4 (±21.1) であった (表 3)。10 下位尺度の平均値は，【オリエンテーション】3.7 (±0.8)，【学習内容・方法】3.7 (±0.7)，【学生—患者関係】3.6 (±0.9)，【教員，看護師—学生相互関係】4.2 (±0.6)，【学生への期待・要求】3.8 (±0.9)，【教員，看護師間の指導調整】3.7 (±0.8)，【目標・課題の設定】3.9 (±0.8)，【実習記録の活用】4.0 (±0.8)，【カンファレンスと時間調整】4.0 (±0.7)，【学生—人的環境関係】4.0 (±0.7) であった。

表 3 総得点および各下位尺度の平均点と各得点領域

	平均値 mean (±標準偏差)	低得点領域 n=14	中得点領域 n=49	高得点領域 n=16
総得点	154.4 (±21.1)	122.9 (±10.5)	153.7 (±9.9)	184.1 (±6.3)
I.オリエンテーション	3.7 (±0.8)	3.1 (±0.8)	3.6 (±0.8)	4.1 (±0.9)
II.学習内容方法	3.7 (±0.7)	3.1 (±0.5)	3.6 (±0.6)	4.3 (±0.8)
III.学生患者の関係	3.6 (±0.9)	3.1 (±0.7)	3.5 (±0.9)	4.3 (±0.9)
IV.教員看護師と学生相互行為	4.2 (±0.6)	3.2 (±0.2)	4.2 (±0.4)	4.9 (±0.1)
V.学生への期待要求	3.8 (±0.9)	2.8 (±0.5)	3.8 (±0.7)	4.7 (±0.5)
VI.教員看護師間の指導調整	3.7 (±0.8)	2.7 (±0.4)	3.7 (±0.7)	4.5 (±0.6)
VII.目標課題の設定	3.9 (±0.8)	3.0 (±0.7)	3.8 (±0.6)	4.9 (±0.3)
VIII.実習記録の活用	4.0 (±0.8)	3.2 (±0.7)	4.0 (±0.6)	4.8 (±0.4)
IX.カンファレンスと時間調整	4.0 (±0.7)	3.4 (±0.7)	3.9 (±0.6)	4.7 (±0.3)
X.学生—人的環境関係	4.0 (±0.7)	3.3 (±0.6)	3.9 (±0.6)	4.8 (±0.2)

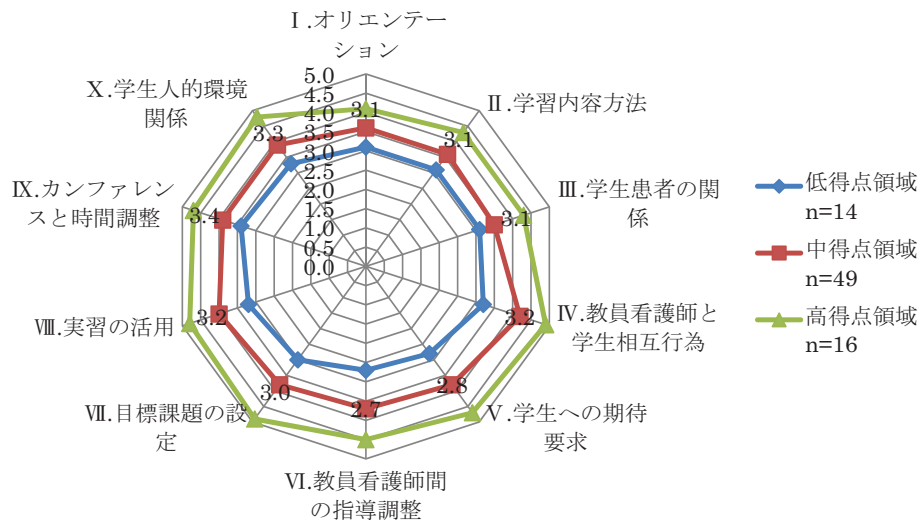


図1 各得点領域別の平均点

総得点とその標準偏差を用いて、高得点領域、中得点領域、低得点領域に分け記述統計を行った。高得点領域は、16名(20.2%)で、総得点の平均値は184.1(±6.3)であった。中得点領域は、49名(62.0%)で、総得点の平均値は、153.7(±9.9)であった。低得点領域は、14名(17.7%)で、総得点の平均値は、122.9(±10.5)であった。

低得点領域の10下位尺度の平均値(図1)は、【オリエンテーション】3.1(±0.8)、【学習内容・方法】3.1(±0.5)、【学生-患者関係】3.1(±0.7)、【教員、看護師-学生相互関係】3.2(±0.2)、【学生への期待・要求】2.8(±0.5)、【教員、看護師間の指導調整】2.7(±0.4)、【目標・課題の設定】3.0(±0.7)、【実習記録の活用】3.2(±0.7)、【カンファレンスと時間調整】3.4(±0.7)、【学生-人的環境関係】3.3(±0.6)であった。

VI. 考察

本研究における10下位尺度の総得点平均値は154.4(±21.1)であり、総得点195の約8割に値する高い評価を占めた。実施した基礎看護学実習Iの実習過程は、総合的には高い評価といえる。ここでは、主として下位尺度項目の結果を詳細に考察し、現在の実習過程の強化と一部改善点を抽出する。

蓑田ら(2009)の先行研究では、基礎看護学実習Iで受持ち患者をもち、看護師と同行し、コミュニケーションを通しての対象の理解や援助に参加

している。この研究でも、同尺度を用いて学生の視点で実習を評価しており、【学生-患者関係】と【教員、看護師-学生相互関係】の評価が最も高かった。受持ち患者を持たず、患者の生活環境や療養生活を見学するA大学の基礎看護学実習Iにおいても、教員、看護師と学生が密に関わったことを示す下位尺度【教員、看護師-学生相互関係】が最も高い評価となった。これは、臨地実習施設の概要からも理解できるように、本学学生に対する臨地実習施設の期待もあり、実習指導者や病院スタッフと教員が実習を調整し、学生の実習目的・目標を効果的に達成できるよう指導していたと考える。また、基礎看護学実習Iは、看護師や他の医療者に同行する見学実習であった。そのため教員や実習指導者は、学生の反応、考えや要求が把握できるという利点があった。

しかし、蓑田ら(2009)の先行研究で評価が高かった【学生-患者関係】は、A大学評価では最も低い評価となった。A大学では、受持ち患者を持たない実習過程であり、看護師と同行した見学実習となるため、学生と患者との直接的なコミュニケーションや関連性における満足感が得られなかったと考える。今後は、短い実習期間であるが、受持ち患者まではいかなくても、同一患者のケアの見学やコミュニケーションを行い、患者の状態や直接的・間接的なコミュニケーションの変化を観察できる実習過程へ改善する。

次に評価が高かったのは、【実習記録の活用】、【カンファレンスと時間調整】、【学生-人的環境関係】であった。A大学の基礎看護学実習Iで

は、日々のカンファレンスに教員と指導者が参加した。実習記録は、教員と指導者が点検し、学生の思考過程を知ることができた。そのために、学生の悩みや課題を、カンファレンスや実習記録から教員や指導者が共通に理解し、実習過程の改善に努め、調整できた。さらに、指導者や教員が他職種に同行することを依頼し、実習目的を達成できる工夫をしていた。

一方、オリエンテーションや既習の学習を実習に活かすことを示す下位尺度【オリエンテーション】、【学習内容・方法】は、評価が低かった。蓑田ら(2009)の先行研究でも、同様の結果を得ている。これは、オリエンテーションの内容や既習の学習と実習過程とが、学生の認識の中でうまく連動できないためだと言える。A大学の实習オリエンテーションでは、既習の病院環境も含めて復習できるように、「看護覚え書」と「看護の基本となるもの」を熟読し、実習目標達成のためにポイントをまとめることを説明している。しかし、結果としてオリエンテーションの内容を実習目標の達成に活かせたと感じていない学生が多かった。また、実習課題を含めた既習の学習内容を、具体的な方法として実習過程に活かすのかをわからず、学生が悩むことになったと考える。これらより、看護大学での既習の学習や自己学習の課題が、臨地実習にどのように結びつくのかを実習目的・目標を踏まえて学生が理解できるように例を用いて具体的に説明する必要がある。また、看護大学1年次前期から実習に取り組む動機づけとなるよう、基礎看護学領域の講義内容に看護技術を取り入れ、病院環境を学生が身近に考えることができるような課題を提示する必要がある。

低得点領域の分析結果では、最も高い評価となったのが、実習時間や休憩時間の調整、カンファレンス時間と内容の適切性を示す【カンファレンスと時間調整】であった。低得点領域の学生は、実習時間の調整に満足しており、また他の学生と意見を交換できるカンファレンスを有効に活用し、自分に不足している知識や技術を補おうとしていた。また、次に評価が高かった【学生一人的環境関係】は、学生同士や看護師、教員、他の医療者との相互関係の円滑さを示すものであり、基礎看護学実習Iを5～6名のチームで実習する有効性を示唆される。

一方、教員と指導者の指導内容の一貫性を示す

【教員、看護師間の指導調整】と教員や指導者が学生に期待する行動の難易度を示す【学生への期待・要求】の評価が低かった。基礎看護学実習Iの前には、実習要項や学生の既習内容を示しながら、教員と指導者が実習内容の調整を行っている。A大学の看護学部は、平成23年度に開設しており、基礎看護学実習Iの実習は2回目であり、学生レディネスの説明が、実習施設へ浸透できていないと予測される。また、看護大学1年次の学生は、教員が講義や演習で説明する看護の原理や原則を、指導者が臨床で説明する看護の応用として理解することができず、教員と指導者間での指導内容の不一致を感じていると考える。

今後、基礎看護学実習Iや基礎看護学実習II、そして領域別実習と実習回数を重ね調整することで、学生のレディネスを実習施設に徐々に理解してもらえることが可能となる。また、臨地実習では、指導者が主体となり実習指導を行い、指導内容を教員と指導者間で共有し、教員が学生のレディネスに合わせて指導された内容を反復すれば、教員と指導者間での統一した実習指導が行える。

VII. 結 語

基礎看護学実習Iの過程を学生の視点から評価した結果、より効果的な実習を行うために以下の課題を抽出した。

1. 同一患者のケアの見学やコミュニケーションをとれ、患者の状態や直接的・間接的なコミュニケーションの変化を観察できる実習過程へと改善する。
2. 既習の学習や自己学習の課題が、臨地実習にどのように結びつくのかを実習目的・目標を踏まえて学生が理解できるように例を用いて具体的に説明する。
3. 看護大学1年前期に、基礎看護学領域の講義内容に看護技術を取り入れ、病院環境を学生が身近に考えることができるような課題を提示する。
4. 大学と実習施設とが、継続した実習内容の調整を行い、互いに学生のレディネスを理解し、実習に取り組む。
5. 臨地実習では、指導者が主体的に実習指導を行い、指導内容を教員と指導者間で共有し、教員が学生に補足指導を行う。

文 献

- 舟島なをみ監修 (2001) : 看護学教育における講義・演習・実習の評価, 医学書院.
- 舟島なをみ監修 (2009) : 看護実践・教育のための測定用具ファイル開発過程から活用の実際まで, 医学書院, 99-126.
- 石塚敏子(2004) : 成人看護学実習における学生による授業過程の評価, 新潟青陵大学紀要, 4, 263-271.
- 松下戦具, 赤井誠生 (2010) : 授業アンケートにおけるリッカート型尺度の選択肢の検討, 大阪大学大学教育実践センター紀要, 7, 69-73.
- 松浦由美子 (2009) : 基礎看護学実習に対する学生評価からみる教授活動への課題, Yanagawariha Fukuokakokusai Kiyō, 5, 46-51.
- 蓑田さゆり, 長江拓子, 小笠原ゆかり, 他 (2009) : 基礎看護学実習 I における授業過程評価～舟島による「授業過程評価スケール—看護学実習用—」～, 四日市看護医療大学紀要, 2(1), 121-128.
- 三輪田隆子, 鳥井元純子, 大菅茂美, 他 (2005) : 臨地実習終了時における看護学生の実習過程に対する評価 舟島の授業過程評価スケールを用いた3年課程・2年課程の学生のアンケート調査からの考察, 大阪医科大学附属看護専門学校紀要, 11, 1-7.
- 野戸結花, 工藤うみ, 北島麻衣子, 他 (2008) : 本学における成人看護学実習評価—学生による実習評価から—, 弘前大学大学院保健学研究科紀要, 7, 9-16.
- 大沢知佳 (2003) : 前期成人看護学実習の教授過程に対する教員の自己評価「授業過程評価スケール (看護学実習用)」を活用して, 秋田県看護教育研究会誌, 28, 2-7.
- 坂本功子 (2007) : 実習指導に対する学生評価 実習評価スケールを用いた学生アンケートからの考察, 奈良県立三室病院看護学雑誌, 23, 97-100.
- 佐久間佐織, 長谷川信子, 小澤香奈恵 (2010) : 基礎看護学実習 I における療養環境についての学生の学び—環境測定結果の分析から—, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 6, 79-85.
- 内海知子, 大浦まり子, 橋田由吏, 他 (2007) : 5年間の成人看護学実習の評価, 香川県立保健医療大学紀要, 3, 151-157.
- 山本智恵子, 土井英子, 杉本幸枝, 他 (2012) : 基礎看護学実習 I の病院実習での学びと課題, 新見公立大学紀要, 33, 119-124.